

をきはめていひおとされたるを、門人橋常樹といへるが、ひとりごとのやうにいへるやう、翁の文詞、大よそ人の趣にさまかはりて、めづらしう思ひめぐらされたるはさることながら、梅の文をかゝむとて、梅をおとしめ難せられたるは、梅のため面ふせぞかしたとひさる事にもせよ、其ものをむねとして、文かき歌よまんには、わがともがらのうひまなびの身にのりとし、まねばん事いかゝあらんといへり、げに常樹がことばもことわり、さる事とおぼゆかし、

〔南島志下物産〕果則龍荔○中石榴橘柿但無梅杏桃李之類、近時有梅移自此間者、唯著花而不結子、〔隨意錄五〕梅賞花者、二漢以上未之有見焉、經傳言梅皆稱實耳、其賞花之詩無先於范曄何遜、又賞花之事無先於趙師雄、然則其賞花蓋六朝而來、與桃李棠棣皆見賞乎風雅、而梅花獨不取乎古者何也、

〔明月記〕建仁二年三月十五日、近日櫻梅花之盛也、今年花甚遲、梅及二月晦開遲、梅近日猶盛也、

〔古今著聞集草木十九〕ある貴所より仰をうけ給て、梅をあまたうへける折ふし、隆祐朝臣白河の花すでにちり侍也、たゞ今見にまかり侍にといざなひければ、けふかゝる事にかゝりて、えなんともなふまじきよし申ければ、をしかへしよみつかはしける、

うつしうる花は千とせの物なればちる木のもとをいそげとぞ思ふ、返し聞侍しをわすれ侍にけり、

名桃稱

〔本草和名十七〕桃核、桃梶仁古音一名桃奴落實著樹不生虫也山龍桃出陶景注一名絹核、一名勾鼻、一名金城、一名綺葉已上四名出兼名花、一名金桃出漢武内傳、一名僻側膠桃膠、一名木核葩墨子五行記出云、桃膠一名桃脂、一名桃膏、一名桃魄、一名桃靈、一名桃精、一名桃父母已上出神仙服餌方、和名毛々、

〔倭名類聚抄十七〕桃子、漢武内傳云、西王母桃、三千年一生實、西王母者仙人名也、桃音陶和

〔箋注倭名類聚抄九〕漢武内傳一卷、舊題漢班固撰、原書西王母桃作母曰此桃說文、桃桃果也、

〔書言字考節用集六生植〕桃、一名仙菓、又有紅桃、毛々モモ又云桃仁又云桃奴